ルイジアナ大学モンロー校と愛媛大学の相互国際交流を通した教員養成の実践

富田 英司，白松 賢，池野 修，隅田 学，向 平和，鴛原 進

愛媛大学　教育学部

Teacher Education Practices through Mutual International Exchange between University of Louisiana at Monroe and Ehime University

Eiji Tomida, Satoshi Shiramatsu, Osamu Ikeno, Manabu Sumida
Heiwa Muko, Susumu Oshihara

Faculty of Education, Ehime University

1．国際交流を通した教員養成の必要性

本邦の高等教育におけるかつての国際交流事業は，他国の優れた文化や科学技術を日本に取り入れる役割を担った国家的エリートを想定したものであった。しかし，現在の社会を取り巻く状況はより幅広い層の学生に国際的経験を求めており，そのニーズに対応した形で国際交流の窓口を広げつつある（小林，2011）。

そのようなより間口の広い国際交流が特に必要とされている領域の１つが教員養成である。現在の教員養成のあり方に直接影響をもたらしている公式文書の１つに平成９年の教育職員養成審議会第一次答申がある（教育職員養成審議会，1997）。この答申には，その後の答申にも引き継がれる枠組みとして，教員に求められる資質能力を「いつの時代にも求められる資質能力」「今後特に求められる資質能力」「得意分野を持つ個性豊かな教員」の３つが提案された。このうち，２つ目の今後特に求められる資質能力として想定されているのが「地球的視野に立って行動するための資質能力」である。この柱は，平成18年の中央教育審議会答申「今後の教員養成・免許制度の在り方について」でも引き継がれており，その内容には，地球，国家，人間等に関する適切な理解，豊かな人間性，国際社会で必要とされる基本的資質能力などが含まれている（中央教育審議会，2006）。

グローバル社会が成立して以来，経済活動は国というカテゴリーにとらわれないで展開されるようになった。グローバル化は各国それぞれの意向や政策によって留めるようなことはできない性質のものであり，それぞれの国の成員が望むかどうかに関わらず，既にどの国の生活も，他国や他地域との密接な交流なしには成り立たない状況となっている。このことはすなわち，本邦の経済活動においてもあらゆる組織がすでに国際社会の一部として機能している，あるいはそれらが今のグローバル化社会の実体にあわせて徐々に適応していかなければ，地域社会においても有効に機能しにくくなることを示唆している。

学校教育はこのような諸組織でいずれ活躍する人々を育てる役割を持つことから，学校で教育に従事する教員もやはり国際的な素養を身につけていることが求められている。しかし，教職に就いた後で国際的な素養を身につけ始めることには非常に多くの困難が伴う。このようなことから，大学がその教員養成の過程において教員志望学生に対して十分な国際経験を持てるよう準備をすることは喫緊の課題である。

愛媛大学教育学部では，そのような背景を踏まえて，既にいくつもの国際交流プログラムが展開されている。少なくとも教員養成課程を主なミッションとしている国内の大学の中では，トップレベルの国際的学習環境を備えている。特に本学部との密接な繋がりを持った交流協定校としては，中国の遼寧師範学校，韓国の順天郷大学，フィリピンのフィリピン大学，米国のワシントン大学バセル校，ルイジアナ大学モンロー校が挙げられる。これらの中で最も代表的なものは，フィリピン大学教育学部と連携した，英

語を教授言語とする海外教育実習プログラムであり，平成20年度から毎年実績を重ねている（上舘他，2012；隅田他，2011；Pawilen et al., 2011）。この取り組みの特筆すべき点は，理科や数学，社会，家庭科といった教科内容を英語圏の子どもたちに日本人学生が教える機会を持っているだけではなく，小学校から高等学校まで幅広い学校種の子どもたちに対して授業をおこなうことである。

筆者らはこの先進的な取り組みのノウハウに基づいて，さらに幅広い学習機会の選択肢とこれまでにない新たな試みを加えるために新しく国際交流プログラムに取り組んできた。本論文はその実践事例について報告するものである。それによって今後，本学ならびに教員養成課程を持つ他の大学の国際交流プログラムの発展にも寄与することを目的としている。

２．国際交流協定の内容

本論文が取り上げる国際交流実践はルイジアナ大学モンロー校（以下，ULM）との学術交流協定に基づいたものである。ULMと愛媛大学教育学部の間で，2012年（平成24年）３月５日に「国立大学法人愛媛大学教育学部とルイジアナ大学モンロー校との学術交流に関する協定書」及び「国立大学法人愛媛大学教育学部とルイジアナ大学モンロー校との学生交流に関する覚書」が交わされた。

この協定書は，両大学が(1)学生の交流，(2)教員及び研究者の交流，(3)共同研究及び共同開発について実現するよう努力すると記している。また，覚書では，授業料等について，両大学は，受入学生の検定料，入学料及び授業料は，相互に不徴収とするとしている。宿舎手配等については，両大学は受入学生が住居を適切な費用で確保できるよう可能な限り努力するものとし，家賃等住居にかかる費用，交通費，生活費，健康保険及び傷害保険については，学生が負担するものとすると規定している。枠組みとしては，１年未満の交換留学とより短期の教育文化視察があり，それぞれの枠組みにおいて両大学が双方にバランスを保ちつつ学生を送りあうこととなっている。

以上のような合意に基づき，平成24年度には，計11名の愛媛大学生をULM及びその周辺の学校へ２回に渡って派遣し，観察を中心とする教育実習(約２週間)を実施した。この年，同時に，計５名のULM学生を愛媛大学で受け入れた。このうち１名は２週間の観察を中心とした教育実習に参加し，残りの４名は５週間に渡る本格的な教育実習を日本の学校でおこなっている。また，１年未満の短期留学生として，ULMより１名を受け入れ，愛媛大学より２名を派遣した。本論文は平成24年度に実施された数週間の交流プログラムである「日米教育文化視察プログラム」について特に事例報告するものである。

３．プログラム内容

本取組は平成24年度の日本学生支援機構による留学生交流支援制度（ショートステイ，ショートビジット）の支援を受けた「日米教育文化視察プログラム」を中心にして，主に教員による渡航費用について支援し，ULMと愛媛大学教育学部との組織的な連携を充実し，学生が質の高い国際交流に参加できることを促すという目的を持っておこなわれた。学生を引率するための教員の渡航費や滞在費等は文部科学省の教員養成改革経費をあてた。

本プログラムの特徴として次の５点を実施当初に掲げた。(1)教員養成課程を履修し，将来教育界に貢献する職業に就く者を対象として，地球的視野に立って行動できる教員の資質能力育成を目的としていること。(2)学生が渡航先の大学の学生と共に活動することに加え，渡航前から渡航先の学生とオンラインで交流することで，短い渡航期間であっても，深い交流が可能であること。(3)両大学ともに周辺地域の治安が安定しており，物価水準も相対的に低く，地域の教員養成への貢献が高く評価されており，安心して参加できること。(4)本プログラムへの参加条件として，今後参加する後輩への助言に協力することを求めることで，学生同士の「学びの共同体」構築を促進することに繋がること。(5)教育効果を明らかにするための調査を実施し，両大学の高等教育に関する協同研究も促進すること。

日米教育文化視察プログラムの目的は，国際性を備えた学校教員を育て，提携する日米両校の周辺地域の発展に寄与することである。愛媛大学の学生にとっての学習目標は，(1)日本とルイジアナ州の教授方法や制度の違いの理解，(2)英語での教授に使われる表現の習得，(3)英語プレゼンテーション能力の獲得，(4)協同的な学びの態度形成の４つである。ULMの学生にとっての学習目標は，(1)日本とルイジアナ州の教授方法や制度の違いの理解，(2)異文化に対する理解と広い視野を持って教育に取り組もうとする態度を身につけること，の２つである。

以下では，平成24年度に実施された４回の活動の概要を説明しながら，ULMと愛媛大学教育学部との組織的な連携体制が現在までにどの程度構築され，愛媛大学の教育学部を中心とする教員志望学生が質の高い国際交流に参加できるための基盤づくりに繋がっているかを示したい。

４．愛媛大学でのショートステイ①

最初に実施されたプログラムは愛媛大学受け入れによるショートステイである。平成24年９月２日から17日まで，愛媛大学をベースとしてあわせて４つの小学校で観察実習をおこなった。参加者はULMの３年生１名であった。約２週間の滞在期間中，最初の週は様々な地域の学校を１日

ずつ訪問した。２週目は愛媛大学教育学部附属小学校で数日間留まり，小学校での生活に密着した観察実習をおこなった。表１はその日程表である。

この訪問を通して，参加ULM学生は日本での経験を教師として大事な経験が得られたと述べている。この学生をサポートするために，愛媛大学の学生も参加し，活きた英語使用経験を得る貴重な経験が得られたと述べている。このステイが成功したことで，その後，２回目のショートステイに参加する学生の公募に良い影響を与えた。結果として，２回目には多くの学生が応募した。また，このあとショートビジットでULMを訪問した学生にとっても，この来日で作られた友人関係によってルイジアナで家族ぐるみの歓待を受けることに繋がった。例えば，参加学生の父はモンローでビーデンハーン美術館公園のディレクターを務めており，その関係で２回に渡ってショートビジットの学生と教員がその施設へ招待された。

このような点から，単に海外に訪問して良い経験ができて終わるのではなく，地域と地域を結び，末永い友人関係を学生の期間だけではなく，教員として働くようになってからも続く関係の構築の第一歩として十分な成果が得られたと言える。

表１．平成24年９月２～17日実施のショートステイの日程表

Date	Events
02 Sun	Arrival at Matsuyama
03 Mon	Visit to Attached schools (New Trimester Ceremony)
04 Tue	Visit to Tamatani Elementary in Hirota-Mura
05 Wed	Visit to Horie Elementary in Horie
06 Thu	A Day Off
07 Fri	Visit to Hisayoshi Elementary School in Ainan-Cho
08 Sat	Excursion to Hiroshima
09 Sun	Town walk, Matsuyama Catsle
10 Mon	Observation in Attached schools: Fifth Graders
11 Tue	Observation in Attached schools: Fifth Graders
12 Wed	Observation in Attached schools: Fifth Graders
13 Thu	Observation in Attached schools: Fifth Graders
14 Fri	Observation in Attached schools: Fifth Graders
15 Sat	Visiting children's camp in Uchiko
16 Sun	Farewell Party
17 Mon	Departure from Matsuyama

表２．平成24年９月20日～10月７日実施のショートビジット①の日程表

Sep. 20 (Thu)	Pick up at DFW, to hotel
Sep. 21 (Fri)	Trip to Austin
Sep. 22 (Sat)	Leave Dallas to Monroe
Sep. 23 (Sun)	Reception at ULM
Sep. 24 (Mon)	School Visits
Sep. 25 (Tue)	School Visits
Sep. 26(Wed)	School Visits
Sep. 27(Thu)	School Visits
Sep. 28 (Fri)	Head to Baton Rouge and then to New Orleans
Sep. 29 (Sat)	Excursion for Cultural Tour
Sep. 30 (Sun)	Leave New Orleans to come back to Monroe
Oct. 1 (Mon)	School Visits
Oct. 2(Tue)	School Visits
Oct. 3 (Wed)	School Visits
Oct. 4 (Thu)	School Visits
Oct. 5 (Fri)	Pick you guys up in the morning head to Dallas
Oct. 6 (Sat)	Fly out (Arrive in Japan on 7th)

５．ULMでのショートビジット①

第１回のショートビジットは平成24年９月20日から10月７日にかけておこなわれた。４名の愛媛大学４年生が参加し，２週間にわたって10校弱の幼稚園から高校を訪問し，いくつかの小学校で日本の文化紹介の授業を実施した。授業は20分程度で，実施回数は10回以上に及ぶ。英語での交流機会を得て，参加学生は不十分な英語力でどのようにコミュニケーションするかという点で多くの工夫をおこない，10回以上のプレゼンテーションを通して徐々に子どもの心を引く内容へと改善していく過程が見て取れた。表２にはその日程表を示している。

学生引率は愛媛大学教育学部の白松賢准教授，向平和准教授，富田英司准教授が担当した。滞在中，主なイベントや訪問先に同行した他，各関連教員への挨拶回り，そして当年度後半のプログラムの実施について打合せをおこなった。

６．愛媛大学でのショートステイ②

第２回のショートステイは平成25年１月12日から２月22日にかけて実施した。４名のULM４年生が教育実習として約５週間，平日は朝から夕方まで出勤して授業をおこなった。このうち２名は松山市立潮見小学校，２名は松前町の私立エンゼル幼稚園で実習をおこなった。英語しか話せない学生が愛媛大学生と各学校の先生方の協力を得て，ほぼ自分たちだけで授業ができるほど異文化環境における教育能力を高めることができた。この期間，ほぼ毎日愛媛大学の学生が交代しながらULM学生の支援をおこなうことで，愛媛大学の学生も英語力を培うと同時に，ULM学生との友人関係を構築することができた。このような学生交流が第２回のショートビジットにおける現地での質の高

い交流にも繋がっている。

このように多くの愛媛大学生がULM実習生の支援に関わるプロセスを促進するために，本プログラムではユーザー数の多いSNSの１つであるフェイスブックが活用された。フェイスブックのグループ機能を使って，このプログラムに関心のある学生が行事案内や支援要請のメッセージを受け取ることができる。その利点としては，(1)閲覧確認ができること，(2)Eメールのように情報が埋もれることが少ないこと，(3)反応が教員も含め他のメンバーにも即座に共有されること，などが挙げられる。そのため，現在では，フェイスブックのようなグループ機能なしに本プログラムを効果的に運用することは困難であるとさえ言えるだろう。

このショートステイ期間中，教育実習の様子を視察すると同時に，教育実習の評価について愛媛大学教育学部教員と研究会をおこなうためにULM教育人間発達学部のシュウィーン教授（教育課程・教授・管理運営学科長）を招聘した。この予算も教員養成改革経費によってまかなわれた。この滞在中，ULM学生が滞在する御幸寮の１室を利用した歓迎会がおこなわれ，ここで日米の学生および教員が交流した。ULM教員が実際に日本にきて，日本の学校現場や文化・風土，大学として国際交流を推進しようとする態度を知ってもらうことは，本取組を日米双方で協同的に進める上での基盤となった。

７．ULMでのショートビジット②

第２回のショートビジットは平成25年２月28日から３月14日の期間実施され，教育学部と理学部のあわせて７名の教員を目指す学生が参加した。ヒューストンでの文化視察の後，ULMに到着すると，教育人間発達学部にて学部長をはじめとした教授陣やスタッフによる大学説明がおこなわれた。その他，ULMの国際交流スペースで，ULM学生によるレセプションが行われ，お互いの自己紹介や特技の披露等を行い，会話を弾ませながら，最後には全員でダンス大会となるなど，現地大学との交流が深くなったことが第２回目において発展した点である。その他，ショートステイのULM学生を愛媛大学の学生が日本でサポートしていたことが功を奏して，ショートビジットでルイジアナを訪れた際にはショートステイ参加学生が家族ぐるみあるいは友達ぐるみで，ショートビジットの学生を歓待してくれるなど，互恵的支援が効果的に働いていることが確認できた。ルイジアナにはわずか２週間の滞在ではあるが，現地を訪れた際にそこに既に友人達がいるため，参加学生は現地コミュニティと深い交流ができている。

ULMの所在するモンロー市では，小学校から高校まで様々な種類の学校計11校へ訪問する他，モンロー市長への表敬訪問，ULMの学生との交流などを行った。学校訪問では，日本文化紹介のプレゼンテーションを行った。訪問した学校では，教育学部附属小学校の協力を得て作成したビデオ教材を利用し，体験活動を交えながら剣道，高度な縄跳び，相撲，竹とんぼ，書道，折り紙などを現地の児童生徒に紹介した。ショートステイで日本にきた学生が教育実習をしている小学校にも訪問し，彼女たちの日本での実習校で撮影してきた小学生のビデオレターをアメリカの子ども達に紹介した。ビデオの中では，日本の小学生がアメリカの小学生に対して，質問を投げかけ，それに対してアメリカの小学生が回答した。それをまたビデオに収め，ショートビジット終了後，日本の小学生に持ち帰って紹介した。

ULMでは受け入れ先教員の尽力によって，ULM教授陣による歓迎の挨拶，スタッフによる大学案内，教育課程・教授・管理運営学科長の自宅における日米の双方の学生共々招かれてのホームパーティなど，ULMの組織的な取組への方向づけが色濃いものとなった。なお，このショートビジットには引率教員として，愛媛大学教育学部の池野修教授と富田英司准教授が参加した。

第２回ショートビジットに参加した学生には，今回の渡航の学習効果を探るために独自にアンケートを実施した。ここでは他の海外交流プログラムに参加した学生に，それらを比較してULMでのショートビジットの独自性を問うた。これらの回答からは，本取組では関連するいくつかの活動が相互に連携し，有機的に機能する学習支援コミュニティの構築に繋がっており，その人間関係の輪のなかに学生が参加することで，質の高い学習経験を得られたことが示唆される。以下には学生からの回答を示す。氏名はイニシャルで示し，（　）内は筆者が付け加えた。

回答１：今回のプログラムではホームステイで７人が１つの家に泊まることによって，プレゼンテーションの準備もはかどり，かつアメリカの住居に住むという文化体験もできた。また，プレゼンテーションを事前に準備することでアメリカの文化だけでなく，日本文化も伝えることができた。ヒューストンでは自分自身で観光プログラムを組み，インターネットで予約する等の経験ができた。

回答２：たくさん授業視察をすることができて，小中高の幅広い年齢層における子どもの実感が分かる。アメリカでの先生の教授法，教室の環境づくりは現地に行ってこそ感じるものがあった。同じ年齢層であるULMの学生と関われることも貴重な経験であった。

回答３：何度も繰り返して発表を行うことができること→工夫・改善が可能。各訪問校の素晴らしい先生方の授業観察・教育観を聞けること。

回答４：元々先に留学していた藤田さん，加藤さん，交換

留学生のＳさんやＭさん，Ｊさん等，かなり多くの人々との連携で多くの人々と触れ合い，地元ならではの経験ができたこと。

回答５：ホームステイ経験：７人で過ごすこと，自分たちで少しずつ計画を考えて行動したこと。（ホストマザーの）Ｗさんの温かさ，人の優しさ，協力の大切さを強く感じた。自分達で考えることが多くて良かった。内容や計画などヒューストンでもモンローでも用意されたものだけでなく，自分たちでつくれた。

回答６：複数の学校においてプレゼンが行える点。複数の校種において学校訪問が行える点。多くの学校訪問

表３．平成25年２月28日～３月14日実施のショートビジット②の日程表（モンロー滞在中のみ）

Date	Time	Activities
3/3 (Sun.)	3:22 pm	Arrival at Monroe from Houston
3/4 (Mon)	8:15 – 11:00 11:00 – 11:30 11:30 – 12:15 12:15 – 3:00 3:30 – 4:00	Ouachita Junior High School Visit a Teacher's Supply Store Lunch at Eastern Empire Restaurant Home to rest Meet with Mayor Jamie Mayo at City Hall
3/5 (Tue)	9:00 – 11:30 11:45 – 2:40 – 3:15 3:20 – 3:50 4:00 – 4:10 6:30 –	Grace Episcopal Elementary School Lunch at McAlister's Deli Shopping trip to Wal-Mart ULM international students' life by Dr. Mara Loeb, Director of International Programs & Services (Strauss 202) ULM admissions and programs by Seth Hall, Recruitment/Admissions (Strauss 202) Welcome by Dean Lemoine (Strauss 202) Dinner in the West Monroe home of Ralph Calhoun
3/6 (Wed)	8:00 – 9:00 10:00 – 10:45 11:40 – 12:30	West Monroe High School English Language Class –observation West Monroe High School Social Studies-presentation West Ridge Middle School Choir Class-observation Lunch at Johnny's Pizza House Restaurant Visit S & J Western Hardware Store
3/7 (Thu)	8:37 -10:00 10:15 – 11:00 11:15 – 12:15 12:50-2:00 2:15 – 3:00 3:30 – 4:15 4:30 - 5:30	Neville High School Math (calculus) Classes Visit Ryan Honda Dealership & Fire Station Lunch at McDonald's Hamburger Restaurant Neville High School Drama Class-observation Visit Historic St. Matthews Church Tea at the Lotus Club (gumbo also will be served) Welcome reception at Culture Connection, Strauss 107
3/8 (Fri)	10:00 am Lunch time After lunch 5:30 pm	Visit Biedenharn Gardens and Museum Lunch at Warehouse No.1 Restaurant Home to rest Karate Class at Bob Allen's Dojo, West Monroe
3/9 (Sat)	11:00	Natchez, Mississippi - 11:00 lunch at Mammy's Cupboard - Visit Melrose Plantation, Walk-a-bout downtown- St. Mary's Cathedral, Travel across river to Comfort Suites in Vidalia and have a snack on patio overlooking river
3/10 (Sun)		Visiting a church
3/11 (Mon)	9:00 – 11:00 12:00-2:00	Boley Elementary (Title II) - 9:00 – 9:45 observations - 10:15 presentation in gym Jesus the Good Shepherd Catholic Elementary School Observations and then presentation for 2nd graders Lunch at either Wendy's Hamburger or China Garden Restaurant then shopping, touring Monroe or rest at home

が行え，アメリカの学校教育の現状を知ることができる点。交換留学が行われており，ULMの学生との交流が行える点。ホームステイを行い，アメリカの暮らしを直に感じることができる点。

８．実践事例のふり返り

以上のように，平成24年度から始まったばかり学生同士の交流ではあるが，わずか１年間の間でULMと愛媛大学の学生の間には多くの友人関係が育まれ，お互いの人生にとってなくてはならないかけがえのない経験をもたらしている。その副産物として，それぞれのキャリア上の目的の明確化やコミュニケーション能力の向上ももたらされている。この成功要因は下記のように分析できる。

１）双方の学生による反復的訪問
２）引率教員による現地重要人物との信頼性構築：この項目は，特別経費が特に貢献した点である。今回の予算措置によって，１年間に延べ５名の教育学部教員が現地に赴くことが出来た。このような訪問履歴が短い期間を通した質の高い連携プログラムの実現を促したと考えられる。
３）ルイジアナ大学モンロー校における窓口教員の確保
４）愛媛大学内での協力体制
５）愛媛大学周辺の学校等の協力
６）１年未満の留学生がULMで現地の友人を作り，その関係性をショートビジットで訪れた学生に繋げてくれたこと

以上，計４つの活動を通して，参加者本人だけではなく，その友人たち，家族，地域の学校の先生方などがそれぞれ大きな学びの機会を得られるプログラムであったという実感を得ている。繰り返し述べるが，このプログラムは参加学生だけではなく，交流に参加する地域と地域がお互いに発展する契機を提供しているという点でその成果は計り知れない。

教員養成改革経費のみならず，日本学生支援機構による支援がなければ，今回のプログラムの成功はあり得ない。特に，アメリカ合衆国の学生は親がどれだけ多くの資産を持っていたとしても，学生本人は親から定期的支援を受けるという習慣がない。従って，日本人学生よりも遥かに重要なのが，受入れ学生への経済的支援である。また，ルイジアナ大学モンロー校と愛媛大学による交流協定においては，他の場合と同様に，双方の対等な受入負担が交流の前提であるため，アメリカ人学生が応募し，実際に参加してもらうことが，日本人学生の渡航の条件にもなっている。そのような意味において，今回，複数の資金源からの支援を受けられたことで初めて，愛媛大学教育学部がアメリカ合衆国の大学と深く交流する非常に希少な機会を活かすことができたと言える。

９．今後の課題

ULMの教育実習生の受け入れについては，受け入れ校をある程度広げつつ，実績を重ねた受け入れ校との協力体制をさらに強化する必要がある。今回の事例では，教育実習生の異文化適応において特に大きな問題は無かったが，今後に備えて，より体系的な異文化適応サポートが重要であろう。例えば，募集段階，選考段階，渡航準備段階，渡航直後段階に分けて，それぞれ異文化適応を促進する知識や技術の獲得の学習機会設定などが考えられる。

愛媛大学のULMの派遣に関しても，訪問先での経験をより有意義な学びとするためには，「訪問先の子どもとのコミュニケーション方法の獲得」，「訪問先の子どもの興味を引き，学びに繋がるプレゼンテーションのテーマの探索」，「将来の教員として獲得することが望まれる異文化理解の能力を獲得するために，特定のテーマに基づいてリサーチを進めるような体系的な文化視察手法の導入」，「日本の文化にULMの学生がより親しめるような交流機会の設定」，「滞在時のコミュニケーションの質を高めるための英語運用能力の向上」などが期待される。

引用文献

中央教育審議会（2006）今後の教員養成・免許制度の在り方について（答申）文部科学省

上舘美緒里・隅田学・富田英司・池野修・深田昭三（2012）「愛媛大学における海外教育実習プログラムの開発と実践(2)：小学校理科グループにおける実践過程の分析」『大学教育実践ジャーナル』10，pp. 15－21

小林明（2011）「日本人学生の海外留学阻害要因と今後の対策」『留学交流』2011年５月号 Vol. ２，pp. １－17

教育職員養成審議会（1997）新たな時代に向けた教員養成の改善方策について（教育職員養成審議会・第１次答申）文部科学省

隅田学・深田昭三・菅谷成子・池野修・鴛原進・上舘美緒里・苅田知則・熊谷隆至・ジョエル ファウスティーノ・杉林英彦・高橋治郎・デイビッド ボグダン・富田英司・福田安典・藤田昌子・向平和・吉村直道・ルース バージン（2011）「愛媛大学における海外教育実習プログラムの開発と実践」『大学教育実践ジャーナル』９，pp. 65－73

Pawilen, G. T. , Sumida, M. , Agcaoili, C. B. , Faustino, J. B. , Fujita, A., Muko, H., Yoshihara, N., Sugaya, N., Ikeno, O., Oshihara, S., & Kumagai, T（2011）“Sharing a Culture of Excellence in Teaching across Boarders: An Evaluation of Ehime University Students Teachers Practice Teaching in the Philippines”『愛媛大学教育実践総合センター紀要』29, pp. 55－67